



ぶつかりあい、わかりあう

園長 野中 泉

今月号のATOMっ子では、いくつかのクラスで懇談会の報告が載っています。中でも、特にいちご組とぶどう組の報告が印象に残りました。いちご組では、若い保育士の椿原が自分自身が2児の母になって初めてぶち当たった親としての挫折を赤裸々に打ち明け、保護者と深い共感が生まれた様子が書かれていました。ぶどう組のページでは、保護者の力を借りながら懇談会がつくれ、「保育士と保護者」の関係を問いなおす内容の報告が載っていましたが、保護者の感想にあった「懇談会は参加するものじゃなくて、保護者も一緒に作っていくものやと思います」という言葉が心に残りました。また、今回のATOMっ子には、間に合いませんでしたが、つい先日行われた父親懇談会では、すいか組の担任が「本当は、保護者同士つながりあうクラスにしていきたいと願っているけれど、自分たちの力不足もあり、うまくいかない」と正直な悩みをお父さんたちに打ち明け、その相談に親身に頭を悩ませてくれる父達の姿を見ることができました。

10月号のATOMっ子で書かせてもらったこともそうですが、この数ヶ月保護者、保育士双方からの「真摯な」そして「正直な」投げかけをきっかけに、改めていろいろな場所で新しい対話がはじまろうとしています。

私も含めて、人は「耳痛い」苦言を素直に受け止めることは、正直難しいものです。また、かつこ悪い自分をさらけ出すことも、これを言ったら相手が気を悪くするかもしれないと思うようなひっかけを、口に出すことも、なかなかの勇気がいることです。けれど、実はその「ぶつかり」の先にこそ、お互いをもっと深く理解しあう関係性が見えてくることもまた、実は人一倍「ぶつかりあう」ことが苦手な私自身が、ATOMで得てきた実感でもあります。

時々、意見を言ってくれたあとに「クレマーだと思われないか心配」という保護者がいます。そうかと思うと「私は、勇気を出して苦情を伝えたのに、園長はちゃんと『苦情』だと受け取ってくれていないの?」と言ってきた保護者もいます。それぞれに、それをきっかけに「対話」できる間柄なのに、どんな苦言も「苦情」と捉えたことはないよとは伝えてきましたが、でも最近になって、ああそうか、前者も後者も、実はもっと違う、でも同じことを心配していたのだと気づきました。きっと「ちゃんと、私が伝えたいことをわかってくれる? まじめに耳を傾けてくれる? 誤解せずに、理解しようとしてくれる?」と、心配してくれていたのだと思うのです。

無認可時代のATOMの初代所長（現理事）であり、現在は大阪観光大学の理事長でもある山本健慈先生は「人生は自己紹介の連続であり、トラブルこそは最高の自己紹介だ」とよくおっしゃっていました。「私はこう思う」「あんたはそんなふう考えるのか」と自分とは違う思考をする他者に会い、それぞれの主張がぶつかることで、驚きながらも、自分を知り相手を理解する。私たちは常々子どもたちにそんな「けんか」（体験）をしてほしいと願っていますが、大人同士になると、途端に躊躇してしまうのはなぜでしょう。

何年前のみかん組のことですが、ひとりの子がものすごい剣幕でまくしたて、もうひとりほただただ黙っているけんかの場面に遭遇したことがあります。片方が一方的にやられているなと思って見ていたら、そのさんざんまくしたてた子が、「お前も言えや! 言いたいこと言わなかったら、わからんやんか」と言いました。すると黙っていた子が「今、聞いてたんや」と言い返しました。「そんなら、次は言えや!」「今、考え中や!」。たった5年か6年しか生きていない子たちが、けんかは双方の言い分を言い合い、そして聞きあうことだとわかっているんだと、感心したことを思い出します。それぞれの主張をおもいっきりぶつけあって、双方が納得できる場所、納得はできなくても譲歩しあえる場所で「おりあい」をつけていく。ATOMの子どもたちは、けんかの仕方も、その収め方も、私たち大人よりずっと上手かもしれません。